

10 摘み取り春菊の品種比較試験

背景と目的

市内では播種作業性の良さからコート種子使用が一般的ですが、令和4年度より基幹品種‘さとあきら’のコート種子が入手できなくなり、入手可能なのはこれまで栽培実績がない1品種‘K’のみとなるため、両品種の収量性等の品種特性を調査しました。また、基幹品種の生種も使用して育苗時や圃場での生育状況から生種利用の可能性も検討しました。

関係先 旭川青果物生産出荷協議会摘み取り春菊部会

試験方法

- ・供試品種：(標準品種)‘さとあきら’ (株サカタのタネ)，コートサイズSS
‘K’ (株寺岡種苗園)，コートサイズS

- ・試験区

(標準区) コート区	‘さとあきら’ のコート種子を播種し，栽培した区
K 区	‘K’ のコート種子を播種し，栽培した区
生種区	‘さとあきら’ の生種を播種し，栽培した区

- ・無加温ハウス栽培，2 作期（初夏まき，抑制），側部に防虫ネットあり

耕種概要

- ・栽培日程：(作期 1) 播種 5 月 13 日，定植 6 月 3 日
(作期 2) 播種 7 月 8 日，定植 7 月 30 日
- ・収穫方法

各本数	収穫期（収穫部位）		
	1 回目 (主茎)	2 回目 (1 次分枝)	3 回目 (2 次分枝)
収穫本数 (本)	1	4	8
残す脇芽数 (本)	4	2	—

※収穫は，長さが 27cm のものを対象とした。

- ・施肥量（2 作期共通） 基肥：N－P－K＝2.0－0.1－0.5 (kg/a)
追肥：N＝0.3 (kg/a) を液肥で 3 回

試験結果

(1) 発芽率，発芽日数（表 1）

コート区に比べ，K 区の発芽率は作期 1 が同等，作期 2 は劣りました。発芽日数は，両作期とも同じでした。生種区の発芽率は両作期とも劣り，発芽日数は両作期とも遅い結果でした。

表 1 発芽率，発芽日数

試験区	作期 1		作期 2	
	発芽率 (%)	発芽日数 (日)	発芽率 (%)	発芽日数 (日)
コート区	81	3	81	4
K 区	82	3	76	4
生種区	74	5	70	5

(2) 規格内収量，規格内割合，一本重，茎径（表 2）

ア 作期 1

コート区に比べ，K 区は規格内収量及び規格内割合が同等，一本重及び茎径は上回りました。生種区は，いずれの項目も同等でした。

イ 作期 2

コート区に比べ，K 区は規格内割合は同等でしたが，規格内収量，一本重及び茎径は上回りました。生種区は，規格内収量が上回り，規格内割合，一本重及び茎径は同等でした。

表 2 規格内収量，規格内割合，一本重，茎径

試験区	作期 1				作期 2			
	規格内 収量 (kg/a)	規格内 割合 (%)	一本重 (g)	茎径 (mm)	規格内 収量 (kg/a)	規格内 割合 (%)	一本重 (g)	茎径 (mm)
コート区	266	88	15	6.9	316	96	18	8.1
K 区	275	89	17	7.1	354	92	21	8.7
生種区	254	87	15	6.9	339	94	19	8.2

(3) その他の特徴

	さとあきら	K
収穫期	収穫がピーク時に集中する。	‘さとあきら’より収穫期が分散する。
着蕾	・作期 1 収穫枝の半数が着蕾。 ・着蕾分枝は茎が細く軽い。	・着蕾は‘さとあきら’の半分以下。 ・着蕾による細い収穫枝が非常に少ない。
茎の硬さ	硬め。特に低温期に硬さが増す。	軟らかめ。高温期は曲がりが増える。
作業性	—	・収穫作業性は‘さとあきら’と同等。 ・蕾除去の手間が少なく，一袋に入れる本数が少ないことから調製作業性が良い。
葉色	両品種とも葉色が濃い株，淡い株が存在するが，‘K’の方が，淡い株の割合が多いため，全体を見ると‘さとあきら’より淡い印象を受ける。	
収穫枝 作期 2 (10/1)		

考察

コート区に比べ，K 区と生種区の規格内収量は，作期 1 が同等，作期 2 が上回ったことから，いずれの種子を選択しても収量が低下することはないと考えられました。‘K’の収穫枝は太くて重い，着蕾が非常に少ないなど‘さとあきら’に比べ優れた特性もありますが，高温期に発芽率が若干落ちる，淡い葉色の枝が比較的多く発生するなどの特性もあることから，特性の違いを理解して栽培することが望まれます。